

三一新書 772

中国の現在と未来

浜 勝 彦 著



三一書房

中国の現在と未来

浜 勝彦著

三 一 書 房

はじめに

一九七一年一〇月、長期にわたる封鎖をうち破って、中国は国連に復帰し、世界の「合法」勢力として、その姿を全世界人民の前にあらわした。

中国革命は、それが現実の勢力となるや否や、ただちに旧世界全体の包囲の下に置かれた。井崗山、瑞金から延安へ、延安から北京へと、中国革命はこの包囲を人民の広汎な参加による各方面の闘争によってうち破り、自己の勢力を拡大してきたのである。

中華人民共和国が成立すると、それはただちにアメリカの封鎖・破壊活動に直面したし、一方ではソ連の監督の下に置かれた。ソ連は中国が独立自主の道を歩む決意であることを知ると、自分もまた中国包囲網の建設にとりかかったのである。ここでも中国は自力更生の原則のもとに、苦渋にみちた試行錯誤を経ながら、人民の広汎な参加と人民の自覚の向上・深化を実現しつつ、包囲と封鎖をうち破ってきた。

中国革命は旧世界全体へのアンチ・テーゼとして自己を形成し、発展してきたがために、当然国境を越えてその影響力を及ぼすであろうことは疑いない。中国共産党の九全大会で採択さ

れた新党章には、「中国共産党はプロレタリア国際主義を堅持し……、人が人を搾取する制度を一掃して、全人類の解放をかちとるため、ともに奮闘するものである」と明確に規定されており、全人類が解放されなければ中国革命は勝利しえない、という認識は共通のものとなっている。「世界革命のために」は、中国人民の合い言葉となっている。

中国が国際舞台での主役の一人となったことによって、中国革命がどのように国境を越えるのか、ということが現実の課題として登場してきた。そしてインドシナ戦争、中東戦争、印・パ戦争などが、いやおうなく中国に次々と態度決定を迫るようになった。中国は「毛主席の革命外交」をこれに対置している。具体的な台湾問題への対応のしかた、印・パ戦争への態度などには、一種の国境固定主義、バンドン体制型ともみられる政策方向がみられる。この方向はプロレタリア国際主義の原則とどのような関係に立つものであろうか。

この問題を考えるにあたっては、次のことを考慮する必要がある。これから数年の中国外交は、中国自体の安全の確保を最大の目的とせざるをえず、他国の変革の促進はこれに従属するということである。中国が国連に足がかりを得たのは、中国包囲網のうちのアメリカの包囲網が再編と若干の後退をよぎなくされたためであって、ソ連とアメリカによる中国包囲の体制は基本的に変化したわけではない。ソ連は毎年中国国境沿いに軍隊を送りこみ、兵力を増強しているのである。したがって周恩来総理が「事にのぞんで恐れる」という諺を引用して自戒したように、中国は、外交政策では当面ソ連の対中戦争発動を抑制するために対米対決緩和の態度

をとり、この過程で台湾問題の平和的解決に努めることを主眼とし、各国の解放闘争に対しては、これを阻害しないように慎重に努力するほかあるまい。この過程での試行錯誤はさけられないであろう。しかし、時間は中国に有利に働く、という確信が中国にはある。

中国革命の現段階、すなわち中国革命がどのように国境を超えるのか、という問題を説明するにあたって当面の中国外交の分析から出発することは一面的なものにならざるをえない。長期的な展望を得るためには、どうしても文化大革命によって形成された新しい体制の内実を明らかにし、そこから必然的に導き出されてくる見とおしによらざるをえない。この新しい体制の内実こそが、ソ連とアメリカの支配層を対決へと駆り立たせるものであり、世界の人民をひきつけるものだからである。

本書は、中国のこの新しい内実を解明し、その中から中国の存在そのものの持つ論理をつかみとり、その挑戦的性格を明らかにすることを目的にしている。

第一章「大寨Ⅱ中国の前衛的農民像」においては、山西省の一つの貧しい村・大寨生産大隊の歴史を概観する。この百戸にも満たない小さな村が、なぜ中国の農村、いや全中国を代表するモデルとなったのか。それは本文の中で読者のみなさんが見てとられるであろうように、この農民たちが自分たちの集団主義の精神と自力更生・刻苦奮闘の精神で、両腕とモッコによってほとんど農業に適していないような山と谷を改造して、社会主義の新農村を造り出したか

らである。社会主義によって解放された人間がいかなる創造力を発揮しうるか、を示したからである。このような農民たちの前には不可能という字はないかのようにみえる。

「世界の農村」として、また「第三世界」の一部として自己を位置づけた文革後の中国においては、農民の解放・自覚の程度の正確な評価こそが、全体制の評価を決定するのである。大寨の持つ可能性をどうとらえるか、全中国の農民がどのように大寨に学んでいるのか、第I章ではこの二つの点がとりあげられている。

大寨の農民のような社会主義的人間たちが、都市ではなく農村に生み出されたところに中国の独自性がある。中国における社会主義の深化もまた、「農村によって都市を包囲する」という中国革命の基本的パターンを示した。

第II章「文革の政治力学——『訓政』から『参政』へ」においては、このパターンによって必然となった、都市と上部構造における再革命、すなわちプロレタリア文化大革命のダイナミックスを説明する。

この文革という長期にわたる深刻な革命によって、中国の政治的体質は基本的に変化して新しい実質を形づくった。この「参政」政治体制の全貌はまだ全面的に明らかになってはいないが、第II章ではこのいくつかの側面をとりあげてゆく。

いわゆる林彪事件については、本章で文革の深化と発展の結果として位置づけている。

第Ⅲ章「中国革命はどのように国境を超えるか」は本書の結論である。ここでは、まず経済建設のモデルとして中国の持つ感染力を明らかにし、反モデルとしての日本との対比を試みる。さらに、長期的にみて中国は人類文明の未来に対してどのような展望を拓くか、これについて考察する。最後に、ニクソン米大統領訪中をめぐる問題点と関連させながら中国外交の将来について簡単にとりあげてみたい。

一九七二年二月

浜 勝彦

中国の現在と未来

目次

はじめに

1

第Ⅰ章 大寨Ⅱ中国の前衛的農民像

13

序 中国の真の主人公 14

1 旧社会の大寨、土地と人 16

2 解放と「翻身」 19

3 集団化のための闘争 21

4 大自然との闘争 27

5 労働管理制度の革新 37

6 党内実権派との闘争 46

7 文革Ⅱ大寨の勝利 53

8 大寨大隊から昔陽県へ 63

9 中国農民の到達点 87

第Ⅱ章 文革の政治力学 93

——「訓政」から「参政」へ

第Ⅲ章 中国革命はどのように国境を超えるか

173

序	都市から農村へ	174
1	革命と生産の経済学	177
2	確立された建設のモデル	188
3	反モデルとしての日本	199
4	毛沢東の思索・一九五六年	205
5	新文明を拓く長征へ	216
6	米・中新時代の意味するもの	230
序	農村から都市へ	94
1	文革の背景と特徴	97
2	文革とは社会契約の再締結である	108
3	文革の展開過程	118
4	パリ・コンミュンの教訓	144
5	未踏社会へのアプローチ	150
6	プロレタリア政治家たちへの試練	158

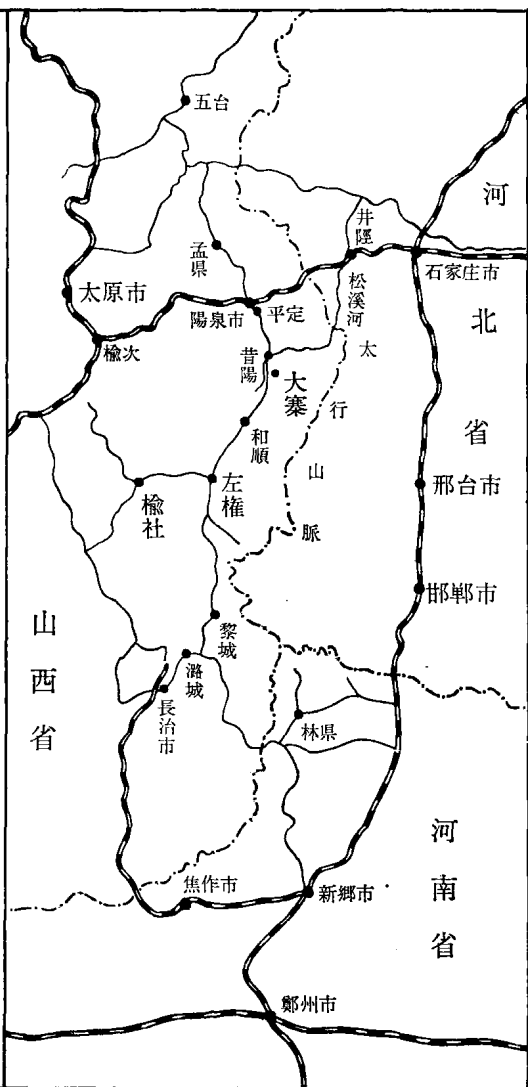
参考文献

245

あとがき

247

第I章 大寨 II 中国の前衛的農民像





序 中国の真の主人公

山西省昔陽県の大寨人民公社大寨生産大隊は、太行山脈の山あいにある三戸、四四〇人（一九七〇年）で五三ヘクタール（約八〇〇ムー）の耕地を持つ小村落である。

一九六四年に毛沢東が「農業は大寨に学ぼう」という呼びかけを発して以来、全国農民の聖地となり、大寨を訪れた中国人は数百万人、外国人も数千人に達するといわれている。日本からも、日中農業農民交流代表団が昨年（一九七一年）六月に参観している。

中国で大寨が模範とされているのは、



元氣はつらつとした大寨の公社員

ここでは集団主義の精神を高めてゆく中で刻苦奮闘・勤儉創業・自力更生で大自然と闘い、階級敵と闘い、一つの寒村を、繁栄する社会主義の新農村へと築きあげて来た点を評価したものである。

中国は基本的にいつて農業国である。文化大革命以来、党は、すべての活動を農業を基礎とする軌道の上にのせて、都市を肥大化させることなく、農業自体を工業と結合する方向で経済を発展させる方針を確立した。このために全中国農業のモデルである大寨には、中国農業の将来がかかっているばかりでなく、中国新文明の全体の将来がかかっているといっても決して過言でない。

「農業は大寨に学ぶ」運動の過程で報道された大寨の実態や、日本人、アメリカ

人などによる見聞によって、大寨生産大隊の歴史はかなり明らかにされた。さらに一九七〇年から開始された「農業は大寨に学ぶ」運動の新段階は、単に大寨だけでなく、全中国農村の情況をかなり具体的に把握することを可能にしている。

これらの手がかりによって、中国農村の変化のあとをたどり、この四半世紀の間に、広大な農村において農民たちがどのようにして前進し、どのような人間として自己を形成してきたかを解明してみよう。農村に下放した青年たち・幹部たち・医師たちと共に、この社会主義農民たちこそが中国革命を前進させる真の主人公・実力者となったのである。

1 旧社会の大寨、土地と人

やせた土地と陳永貴

大寨とは、いったいどんなところだろうか。

「山西省といっても大方の日本人は知らないかのようである。それはたしかに山奥の国であり、はるかなる彼方の土地である。北京から京漢線の汽車に乗って、半日南下すると石家荘に着く。そこから西に折れると石太線にはいる。韓信の背水の陣で名高い井陘を過ぎると、それまで右